

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第72号

2014年9月

第7回柴田フォーラム、北の都金沢大学で開催

編集委員会委員長 西川 隆

日本薬史学会の第7回柴田フォーラムが2014年8月2日(土)午後1時30分から、初めて東京を離れ、みどり豊かな金沢大学自然科学研究棟1号館「薬学プレゼンテーション室」で約30名が参加して開かれた。会は佐々木陽平氏(金沢大学医薬保健研究領域薬系分子生薬研究室)の進行により進められた。

最初に相見則郎・同フォーラム委員長から開会挨拶が行われ、引き続き①長谷川孝徳氏(北陸大学未

来創造学部教授)の講演「加賀藩士の家伝薬について」、②奥田 潤氏(名城大学名誉教授・日本薬史学会名誉会員)の講演「薬師如来像とその薬壺の研究から私が学び得たもの」の順で行われた。両講演とも、これぞ薬史学研究のテーマといえる興味深いかつ格調の高い内容であつた。

この後、恒例の懇親会が「すみれ亭」でなごやかに行われ、午後6時半過ぎに終えた。

講演1 加賀藩士の家伝薬について

長谷川孝徳(北陸大学未来創造学部教授)

編集委員 荒木二夫

司会の金沢大学医薬保健研究領域薬学系准教授・佐々木陽平先生から、「演者・長谷川先生のご専門は、日本文化史、特に甲冑、刀剣等の研究であるが、その中で武具の防虫、防黴について村田家古文書を調

査している産物として、今回の加賀藩士の家伝薬の研究が始まった」旨の紹介があり、講演が始まった。

村田家は、江戸時代の加賀藩年寄役、奥村宗家(17,000石)の家臣で百石取の家柄である。村田家で

薬史学会創立60周年記念募金にご協力を!

発起人代表・日本薬史学会会長 津谷喜一郎

2014年4月19日開催の日本薬史学会理事・評議員会ならびに総会において承認されました「薬史学会創立60周年記念募金」の実施に関する活動方針が、常任理事会で決定しましたので、いよいよ募金活動を始めさせて戴きます。趣意書や振込用紙など詳細は文書にて正式にご依頼いたしますが、①募金方法は1口5,000円以上で郵便振り込み、②募集期間は2014年10月から2015年9月まで、③募集金額は200万円です。会員の皆様のご協力を心からお願いいたします。

は、家伝薬「五香湯」を製造販売していた。一般には、村田五香湯と呼ばれ、産前産後の妙薬とされていた。この他にも、越中野尻(現・富山県南砺市野尻)の五香湯、綿屋の五香湯など、数箇所では製造販売されていたようだが、各伝来により処方内容は異なる。処方の基本は、桂心、茯苓、川芎であり、その配合割合や付加される生薬に違いがある。明治期以降になっても、村田五香湯は、金沢・石黒屋の烏犀円、中屋の混元丹、黒田の紫雪等とともに、地方的に名声を得ていたが、戦中に合併された。しかし、実質的には昭和30年代まで、販売が継続されていた超ロングセラーである。ちなみに、演者の実家に保存されていた配置薬の中にも五香湯が含まれていたという。江戸時代の販売実績は明らかではないが、明治から大正までの「売薬売捌帳」によれば、平均して月に350包程度を売り上げがあったことが判っている。価格については明らかではないが、かなりの

収入であったことが推察できる。

現在、村田家文書は、石川県歴史博物館に所蔵されている。そのうち、薬業関係資料としては、3件ある。①天保2年(1830)の「薬性能毒抜書」には救急時の対応、②同3年の「家伝秘方」には、調合法、服用方法、服薬中の禁忌等に加えて、順気散(精神安定薬か)、癩疽妙薬、火傷瘡妙薬等が記されており、③嘉永3年(1850)の「五香湯由来二付覚」には、加賀藩の筆頭家老、本多家中の村越仏紫方に由来していることが記されている。

講演後の質疑応答では、加賀藩の家老、重役や武家の家計について、加賀藩の飛び地が近江、琵琶湖畔に存在していた(前田利家の妻・松の化粧料として)こと等が解説されるなど、満ち足りた時間を頂いた講演であった。

このような興味深い研究がこれからも発掘、発展されることが期待される。

講演2 「薬師如来像と薬壺」の研究から私が学び得たもの

奥田 潤(名城大学名誉教授)

編集委員 荒木二夫

座長の富山大学和漢薬総合研究所・伏見裕利先生より、演者・奥田先生の学歴が紹介された。演者がフランスに留学していた1962、3年ごろ、パリ市内の薬局では薬を貯蔵するための大小の壺が飾られていたのが印象的であった。帰国後、日本で薬と壺について調べたところ、薬師如来像が左手に持つ薬壺に巡りあい、研究が始まった。

本講演は、薬に関するバラモン教のヴァルナ神、四本有する手の左手の1本に薬壺を持つヒンドゥー教のダンヴァンタリ神の紹介からスタートした。仏教については、中国における薬師如来像と壁画、韓国における国宝・宝物薬師如来像が説明されたが、数は多くない。あまり信仰されなかった中国、韓国と異なり、わが国では、薬師如来が大いに信仰された。病人を救い、その苦しみを除く、現世利益の仏としてあがめられた薬師如来像は、奈良時代から室町時代にかけて重要文化財指定のものだけで約250

体も創造され、そのうち薬壺をもつ薬師如来像は、約120体(48%)存在する。薬師如来像が左手に所持する薬壺は、平安中期に僧不空が訳した「念誦儀軌」が知られるようになってから作出され始めたもので、壺の中には何も入っていない。

聖武天皇が全国に建立した国分寺、国分尼寺合わせて66寺のうち、32寺は薬師如来像が本尊とされている。山口県防府市の周防国分寺において改築のためのご本尊・薬師如来像の移動作業中に、薬壺の中に内臓物(220g)が入っていることが判明し、唯一の例外となった。演者は、野呂征男教授らと協力してその内容物(17.2g)を分析した結果、穀類5種(米、大麦、小麦、大豆、小豆)、生薬5種(白檀、石菖根、菖蒲根、人參、丁子)、鉱物6種(白水晶、青・紫色鉛ガラス、金箔、銀箔、球状石灰石)が絹の袋に入れられ、小さな五輪塔とともに薬壺に収められていた。蓋裏の銘には、木釘で封をしたのは元

禄12年(1699)とある。当時の人々は、穀類に豊作を、生薬に病人の速やかな快復を、鉱物にご利益を祈念して納入したものと思われる。

薬壺の内容物の研究では、基礎薬学の知識が必要であったが、住民の祈りの心を研究するためには、患者の心の研究と同様、人文社会薬学が必須となる。

今後の薬学教育の中でどのように対応してゆくべきか、演者は具体的な提案を示し、講演を終えられた。

今後、薬史学会としても取り組まなくてはならない大きなテーマであると考えられる。

日本薬史学会2014年会(福岡)のご案内

年会長 笹栗 俊之(九州大学大学院 医学研究院 臨床薬理学分野)

日本薬史学会2014年会を、2014年11月22日(土)に、九州大学医学部百年講堂(福岡市東区馬出3丁目1番1号)にて開催いたします。

今年会では、生薬学がご専門の正山征洋先生(九州大学名誉教授、長崎国際大学薬学部教授)と九州の医薬史に詳しい佐藤裕先生(国東市民病院)に特別講演をお願いしており、大変興味深いお話が聴けるとおもいます。一般演題には、様々な領域から14題をご登録いただいております、活発な議論ができると考えております。

玄界灘の海の幸が美味しい秋の福岡で皆様にお会いできることを、たいへん楽しみにしております。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

年会プログラム

受付(9:30~)

開会の挨拶(10:00~10:05)

2014年会の開催にあたって

2014年会長 笹栗俊之

演題1~2(10:10~10:42)

1. 米国における薬剤師職能の変化
○赤木佳寿子(一橋大学大学院 社会学研究科)
2. 大分県医学校病院(明治12-22年)薬局長五十川徹夫に関するメモ
○五位野政彦(東京海道病院 薬剤科)

演題3~4(10:44~11:16)

3. 「石見銀山鼠取り」考察
○成田研一(島根県薬剤師会 江津・邑智支部)
4. 「たなべや振出薬」と「黒川大和(大掾藤原金永)の考察
○新開利治、松本和男(日本薬史学会会員)

演題5~6(11:18~11:50)

5. 歴史的病院の諸相
○石田純郎(岡山大学医学部)
6. 備中・備前での医薬に関する歴史
○五味田 裕(岡山大学名誉教授・岡山大学客員研究員)

昼食・休憩(12:00~13:30)

日本薬史学会理事・評議員合同会議

(12:10~13:10) 会議室

特別講演1(13:30~14:00)

演者:九州大学名誉教授・長崎国際大学薬学部 正山征洋

演題:ボタニカルアートから見た薬の歴史

特別講演2(14:00~15:00)

演者:国東市民病院 佐藤 裕

演題:北部九州が生んだ二人の科学者:賀来飛霞(本草学)と林洞海(薬理学)

休憩(15:00~15:10)

演題7～8 (15:10～15:42)

7. キニホフ『植物印葉図譜』の写本
○河村典久(中京大学 人工知能高等研究所)
8. 医薬品の一般名に関する考察(3): 酵素に作用する薬物の名称
○三澤美和(日本薬科大学 薬理学分野)

演題9～10 (15:44～16:16)

9. 明治中期札幌の売薬広告－北海道毎日新聞明治28年新年号より－
○本間克明((株)ファーマホールディング)
10. 明治前期における国産人参の輸出とその生産体制
○童 徳琴(九州大学 東洋史学研究室)

演題11～12 (16:18～16:50)

11. 日向薬事始め(その17)－日向における種痘の歴史－再考(V)－若山健海著、嘉永西載「種痘人名録」について(2)－
○山本郁男¹⁾、岸信行^{2,3)}、高村徳人^{2,4)}、宇佐見則行⁵⁾
(前・九州保健福祉大学薬学部¹⁾、九州保健福祉大学 QOL研究機構²⁾、宮崎・日向・富高薬局³⁾、九州保健福祉大学薬学部⁴⁾、北陸大学薬学部⁵⁾)
12. Cannabinoid-based medicines の歴史と本邦における規制について
○宮路天平(東京大学大学院 医学系研究科 臨床試験データ管理学講座)

演題13～14 (16:52～17:24)

13. 江戸期の蒸溜器について
○ヴォルフガング ミヒェル(九州大学名誉教授)
14. 内藤記念くすり博物館所蔵の中国・大明正徳年製の銘がある薬研の蛍光 X線元素分析
○奥田 潤(名城大学薬学部)、森田宏(内藤くすり博物館)

2015年会 年会長 挨拶(17:25～)

村岡 修(日本薬史学会関西支部長)

閉会の挨拶(17:35～)

2014年会長 笹栗俊之

懇親会(18:00～)

懇親会会場は、年会会場の隣の部屋です。

アナウンスメント

①参加費

年会：会員(事前4000円、当日5000円)、
非会員(6000円)、学生(1000円)

懇親会：会員・非会員5000円、学生1000円

②年会事務局・会場

【年会事務局】九州大学大学院医学研究院臨床薬理
学分野、事務局長：吉原 達也

〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

電話：092-642-6082 Fax：092-642-6084

E-mail：kusuri@med.kyushu-u.ac.jp

③薬史ツアーについて

2014年会では、薬史ツアーを以下の要領で開催いたします。たくさんのご参加をお待ちしております。
日時：2014年11月23日(日)9時～16時頃(予定)
定員29名程度、料金3000円程度(昼食代別、当日支払い予定)

九州大学馬出キャンパス

↓中富記念くすり博物館

↓吉野ヶ里歴史公園

九州大学馬出キャンパス(予定)

④参加申込み方法

薬史レター前号(71号)の申込書を郵送またはFaxにてお送り頂くか、下記の事項を記入しE-mailにて年会事務局にお送り下さい。

- ①氏名(フリガナ)
②日本薬史学会 会員・非会員・学生
③所属 ④住所 ⑤電話番号 ⑥Fax番号
⑦E-mail(勤務先の場合は所属を明記)
⑧懇親会参加の有無 ⑨合計金額
⑩薬史ツアー参加の有無

事前参加申込みは、10月31日をもって締め切ります。参加費は、本年は事前振込みとなります。10月31日までに以下の振込先にお振込みください。そ

れ以降は当日参加とさせていただきますので、当日にお支払い下さい。

【振込先】

郵便振替口座

口座記号番号：01710-5-139363

口座名称：日本薬史学会2014年会（福岡）
（ニホンヤクシガクカイニセンジ ユウネンカイ（フカカ））

あるいは

ゆうちょ銀行 一七九店（店番179）

口座番号：当座預金 0139363

口座名称：日本薬史学会2014年会（福岡）
（ニホンヤクシガクカイニセンジ ユウネンカイ（フカカ））

なお、理事・評議員合同会議にご出席の先生にはご昼食を準備いたします。代金が別に1000円程度

かかりますので、当日に徴収いたします。

⑤口頭発表に関するご案内

発表時間は質疑応答を含め15分、これに発表者・座長の交代分の2分が加わり、合計17分となります。Microsoft office 2007に対応したノートパソコンをこちらで準備いたします。2007以降のバージョンをご使用の方は、互換性のある形式での保存をお願いいたします。ただし、特殊な使用方法は対応しかねますのでご注意ください。また、Macをご使用されている方などPCをご持参頂いても結構です。

ご発表の方は11月19日（水）までに事務局にお送りください。当日ご持参の場合は、発表1時間前までにお持ちください。

会場へのアクセス（百年講堂のHP参照：<http://www.med.kyushu-u.ac.jp/100ko-do/>）



中部支部だより

中部支部例会・講演会開催のお知らせ

日本薬史学会中部支部長 河村典久

下記の通り例会を開催いたしますのでご案内いたします。

開催予定日時：2014年12月6日（土）午後4時

開催予定場所：名城大学名駅サテライト・多目的室
（名古屋市市中村区名駅3-26-8）

①尾張本草学と「嘗百社」

○河村典久

中京大学 人工知能高等研究所(元金城学院大学)

②『宋板傷寒論』の権衡の検討

○牧野利明、笛木司²⁾、松岡尚則³⁾

- 1) 名古屋市立大学大学院薬学研究所生薬学分野
- 2) マツヤ薬局
- 3) 東邦大学総合診療・急病講座

中部支部事務局

日本薬史学会・中部支部事務局長 飯田耕太郎

名城大学薬学部 薬学教育開発センター
教育開発部門

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL：052-839-2710(直通)

FAX：052-834-8090

E-mail：iida@meijo-u.ac.jp

関西支部だより

第8回 日本薬史学会関西支部研修会報告

日本薬史学会関西支部 研修会世話人 宮崎啓一

2014年7月12日(土)16時から、田村薬品工業株式会社社会議室(大阪市中央区道修町)において、「第8回日本薬史学会関西支部研修会」が開催されました。京都薬科大学名誉教授桜井 弘先生ひろむらをお招きし、「植田龍太郎とわが国の無機医薬品研究」の演題でご講演いただきました。

今回、折りからの台風8号の影響が気になるころではありましたが、予想された進路が外れ、太平洋高気圧も未だ成長の途中であったらしく、当日は比較的天候にも恵まれ、当研修会を開催することができました。

色素探索から金属錯体へ

かつてヨーロッパでは、青い色素(顔料)が求められていた。ベルリンのディースバッハは、1704年にベルリンブルーやプルシアンブルーの名称で知られる「紫色を帯びた暗い青色色素」を発見した。1724年にイギリスのウッドワードは、本色素を「草木の灰と牛の血液」から安価に製造できることを公表の後、瞬く間に世界中で使われるようになった。わが国では1763年に平賀源内により「紺青(こんじょう)」として紹介された。紺青の正体は、鉄錯体 $\text{FeIII}_4[\text{FeII}(\text{CN})_6]_3$ であり、もっとも古い錯体の例のひとつである。

ウェルナーから柴田雄次へ

有機化学の世界では1848年にルイ・パスツールが葡萄酒から得たラセミ体酒石酸の光学分割に成功

する一方、当時錯体の世界では立体構造や異性体の存在は見出されていなかった。チューリヒ大学のアルフレッド・ウェルナー(1866-1919)は1893年のある夜、夢で錯体の八面体構造の着想をえて、一夜のうちに文献に基づいて配位 coordination という概念を導入し、錯体構造に関する論文をまとめたといわれる。ウェルナーはその後10年におよぶ研究の末、配位理論を完成させ、錯体の立体構造や異性体の存在を明らかにした。ペイロン塩($\text{cis-PtCl}_2(\text{NH}_3)_2$)の構造異性の解明もウェルナーの努力によっており、1913年にノーベル化学賞を受賞した。ウェルナーの下でコバルトのアンミン錯体の光学分割を研究する等し、錯体の吸収スペクトル法を学んで帰国したのが東京帝国大学の柴田雄次(1882-1980)であった。

柴田雄次から植田龍太郎の分光化学系列の発見へ

柴田雄次は、錯体化学と分光学をわが国に移植し、無機化学・錯体化学研究をリードした。彼の多くの後進のひとり植田龍太郎(1903-1962)は金属錯体の酸化酵素的酸化作用すなわち金属錯体が酸化酵素に類似した作用を示すという『生物無機化学』に向けた研究を行った。植田龍太郎の名前は、無機化学や錯体化学の領域では、「分光化学系列」の発見者としてあまりにも有名である。植田の「分光化学系列」の発見はわが国の錯体化学研究を世界レベルにまで高め、後に配位子場理論により定量的法則であることが解明された。第二次世界大戦前後の混乱期中、

植田は錯体化学の入門書となる名著「金属化合物の色と構造」(1944)を出版した。本書に魅了され、錯体化学への道を進む多くの後進たちが生まれた。

植田龍太郎から中原昭次へ

植田龍太郎と約10年間研究をともにした中原昭次(1923-2008)はイエール大学のWangらと鉄タンパク質ヘモグロビンをテーマとして、生命における金属の役割に関する研究をともにした。中原は大阪大学では金属-ペプチド錯体やヘモシアニン、プラスチックシアニン等の銅タンパク質・銅酵素の活性部位の構造と機能の分光学的研究を展開し、わが国の生物無機化学研究のリーダーのひとりとなった。1979年にはわが国最初の生物無機化学の教科書「入門生物無機化学」(中原昭次・山内 脩共著)を著した。本書は植田の「金属化合物の色と構造」とともに生物無機化学領域の名著となり、後進へのバイブル的存在となった。

薬学領域の生物無機化学～喜谷喜徳へ

中原昭次と同時代の薬学領域でも、植田の「金属化合物の色と構造」を読み、高い希望と夢をいだいて研究したであろうと推定されるグループが、生命における金属の役割を活発に研究していた。彼らの研究会の中のひとり喜谷喜徳(1923-2010)は多数の研究を展開しながら、白金錯体に注目していた。アメリカでは偶然に白金錯体シスプラチン(ペイロン塩に同じ)の細胞分裂の阻害が見出され、1978年に抗がん剤として承認された。この大発見は、簡単な構造の錯体が医薬品となることを示した最初の例となった。シスプラチンの強い腎毒性から錯体のドラッグデザインの必要性が叫ばれ、この状況の中で、喜谷喜徳は第三世代の抗がん白金錯体オキサリプラチンの開発に成功した。

柴田雄次-植田龍太郎が築いたわが国の無機化学・錯体化学の多彩な道のひとつが、無機医薬品創製の成功例として花を咲かせた。

本研修会には初参加、会員および非会員をあわせ、26名にご参加いただきました(懇親会参加者計



交流会場の桜井先生

23名)。

有機化学と無機化学の両面を備えた錯体化学に対する興味からくすりの道修町等近隣の試薬メーカーに従事する方からもご興味いただきました。

研修会終了後、場所を交流会場に移して引き続き、桜井先生のご講演内容、今後の研修会さらに当学会の運営に関し、活発な議論がなされました。

今回の研修会では化学史に関連する内容でしたが、今後も関西支部は村岡 修関西支部長の下、従来路線の民間薬および伝承薬等を中心に企画し、内容としては主に生薬、和漢薬および香料等の分野を扱いとします。また、これまでは『くすりの道修町資料館』を会場とすることがほとんどでしたが、今後は内容および交通の便等を考慮し、その都度開催場所を検討いたします。

これまで関西支部の会員拡充には当研修会の開催が大きく貢献していることから今後も支部活動の一環として、当研修会の開催を継続します。今回も当研修会の参加者からの当学会に入会予定の方が数名おられます。

最後に桜井先生のご健康とますますのご発展を祈念して、第8回日本薬史学会関西支部研修会および交流会は成功裏に閉会いたしました。

参考資料：桜井 弘、「植田龍太郎とわが国の無機医薬品研究」、第8回 日本薬史学会関西支部研修会レジュメ(2014年7月12日)

薬史往来 2つの長谷川泰銅像：本郷湯島と越後長岡

元東京女子医科大学図書館司書 堀江 幸司

済生学舎を設立した長谷川泰(1842-1912)は、内務省衛生局長も務め明治期の衛生行政の中心人物として活躍し、没後、その功績を称えて、大正5年(1916)、「長谷川泰先生之銅像」(鑄塑原型・武石弘三郎、台座設計・岡田信一郎)が建立されることとなります。銅像の芸術性は、当時、独逸フランクフルト市にあった文豪ゲーテの座像に匹敵するといわれ、4月20日に挙行された除幕式では、親友であった石黒忠恵(陸軍軍医総監)が祝辞を述べています。

『柳塘遺影』(長谷川泰写真集)(昭和9年刊)に、この銅像と除幕式の写真が載っていますが、銅像の場所について、説明文には「湯島公園」「ゆかりの地湯島臺上緑深さほとり」とあるだけで詳しくは書かれていません。調査したところ本郷の湯島天神境内が「湯島公園」と呼ばれた時期があり、銅像は、「切通電車通」(現在の春日通り)に面した崖の上、本殿の裏側の回廊となっているあたりにあったことがわかりました。

残念なことに、銅像は、戦時中に供出され、

戦後、主を失った台座が無残な形で残されていました。その台座も境内の改修の際に撤去、廃棄され、永久に残すはずであった銅像が、済生学舎ゆかりの地(本郷湯島)から消えてしまっていました。

一昨年、平成24年(2012)は、長谷川泰の生誕170年、没後100年の節目の年にあたり、新潟県長岡市新組地区(長谷川泰の出身地)の「長谷川泰を語る会」が中心になって、湯島にあった銅像をモデルに、新たな「長谷川泰翁像」を大黒農村公園内に建立しました。銅像と台座の制作者は、彫刻家の峰村哲也氏(東京芸術大学卒)です。湯島の銅像の制作者である武石弘三郎は、東京美術学校の一期生ですから峰村氏は後輩にあたります。一度、消えてしまった長谷川泰の銅像が、いろいろな方々の思いと努力により新たなデザインを得て再建されたことになります。

銅像は、和服姿で椅子に座って右手に書籍を広げています。書籍を読みながら、未来を見つめているようです。

編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定による経費削減のため、「薬史レター」のあり方について見直中です。その方向性は、①紙媒体からEメール配信に原則切替える、②発行回数は年4回を2回程度とする、③1号のページ数は8ページ以内とするなどです。これで経費は30%ほどの削減が見込まれます。実施日など詳細は未定です。ご意見をお聞かせ下さい。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第72号 2014年9月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>